畫圖西遊譚

書名 画図西遊譚
全五冊之内
第壱巻
年 月 日
第 號
青藜書屋藏

司馬道人以蘭學擅名若其西洋畫銅板爲吾日本創業之作此其出其餘技山川之真寫人物之變態一披覽之如遊四方也記遊者夥矣

衛人遊之譚畧因其所觀寫其胸中意可謂人非其人畫雖為畫者乎余於此編甚喜之

享和三年秋初

春琴選書

西遊旅談叙

司馬君岳之峻之性尤工図画生業嘗西遊瓊浦観紅毛之風景之勝画其所見参考己意揮之君果名曰顕之小冊実足以不足遠観之者而退説者足無探索冊得視やふの

友人德言輯之名曰西遊雜詠乃持以來問叙余
覽之曰自山川草木禽獸以至於萬室器什
之類無所不圖隆景壇場亦無遺桂夷之境
無所不記唯手雜無亂此集也非圖畫之雜非
譜錄之雜若言之雜也其意足之矣哉未之

見也公夫呈詩詢之未為實能之手畢不能使其

而見之般狀怪耀照爍如法之妙是庸陋之徒

為滄攪之手不能使其而悪之滄迴叙述所備

如淡之詳敷浮生空林木變榮華者之雅

也然要是志示安小集曰雅硯工東援人將來居

以雅俗之語通于海内普寰彰其神妙奇焉也白

之而為不啻於今之所為雑也果書以彌洋

與余善

寛政甲寅之年五月

赤穂　神吉主敬撰

西遊旅譚序

余嘗遊於伊豆浴乎熱海而登于日金山山上有小山曰圓山前抱天城之峻後負函關之巖右富嶽之皚ゝ左巨島之圍ゝ俯察衆山之峛崺周覽羣嶼之崒屼立觀十邦坐辨八極實東海之絕勝也而天下之奇觀也乃探篋裝操筆硯將畧圖真形以示於同好及臨紙醮

筆若存若亡無由下毫於是釋筆喟然嘆曰吁嗟聞之古者善畫有舍筆松豈不信然哉頃聞友生江漾司馬氏齋其所著西遊旅譚諗余題其篇端開卷閱之則遊乎西邦之記也其所經過名都樂國神宇梵屋靡不采覽異言殊辭童謠歌謳靡不畢載間之以圖畫以便其觀覽因試案其日金山圖崎嶇嵯峨堂

泱鬱紆髣髴若視其處恍惚若在其所
復亦嘆曰寫真之妙一至於斯乎余雖
未西遊也覽其所已觀而信其所未遊
昔者有為齊王畫者王問曰畫孰冣難
冣易曰犬馬冣難鬼魅冣易犬馬旦暮
在人之前不可類之故難鬼魅無形無
形者不見故易司馬氏是舉也演風俗
之美惡圖地形之險易皆考實按形之

事也豈特犬馬之難哉若夫使斯文遭輶軒之使以為奏籍亦必為洽見之奇書不刋之碩記也曰以是為序云

寛政甲寅五月戊申

福山　太田方撰

西遊旅譚巻之一

天明戊申の四月廿三日芝門を發して神奈川の驛にいたる青木町より右の方山に登る熊野権現の宮又飯綱の社あり夫より田畑をゆきて一本松にて小くるき所を是よりかし臨バ南蒼海をのぞむ海中に洲あり乃天女の社あり其向ふハ野毛本目。十二天の森ちかくる東の方筑波山西の方冨嶽に對す甚の絶景なり

小田原の辨より右の方に入豆州熱海までを七里みふ

山中にして左の方ハ海也大島初島見へて景佳此山中大石多
石を切出ス（土肥又真鶴石ト云）近年伊豆御影石と云も此所の事三里余
土肥村ニ至ル（田夫ノ家ニテ酒食ヲ商）これをとふりて熱海に至る本陣今井
半太夫方也園中より温泉涌出する事昼夜に六度
甚熱湯にして塩気有り此一村總て[illegible]温泉あります
海中にもわき出る所有夫より七八町東の方山路をとを
て伊豆権現の社有般若院と云其山下の渚辺に飛
泉有極よき湯也病を治効験の事有し俗云鉄
気ありて寒冷なりし俗是を称して権現の湯と云

神奈川ヨリ南海ヲ望ム
野毛
洲間弁天
本目
熱海之圖

日金山ハ熱海より登る事五十町頂に地蔵堂丈六の銅仏あり僧房三軒あり肉食妻帯の俗人の居所なり誠に深山にして田畑不作只蕨小笹を生じて樹なし鹿猿狼多し夫より又登る事五町丸山あり其山径殆一人を通ずべし此絶頂より四方を望めバ

伊豆國加茂郡日金頂所眺望者十國五島自子至卯相模國武蔵國安房國上總國自辰至申其國所隷之南五箇島及遠江國自酉至亥駿河國信濃國甲斐國

實に眺望四維に達するところの絶景ありて画意に
彩ろいふも經營甚かりし
溫泉より西南の方來の社あり大貴巳命を祠る
總て此邊に大楠あり十五圍の樹を見る
熱海より三島に道還の方へ越るに五里計り山中にして
人家なし二里ふ登峠の地に寵ある堂宇肉食
妻帶其茅屋に老婆一人をみる白髮を乱し火を焚て居
りし傍に不見寞寥と然として人語の響きかず深山
幽谷も事問人もなければ夫より山を下りて軽井沢と云

所あらぬる初(ハジメ)て人(ニン)家(カ)より又ビンノ澤(サハ)平井邑(コク)なるべし
三島清水へ出る此山中多く天麻(テンマ)天南星(ナンセウ)の類多し
五里の山路(ヤマチ)茅(カヤ)生じて大木なし海より箱根足高山見え
伊豆天城(アマギ)山 五里 十四里人家なし大木多し熊住 見わたし佳景(カケイ ヨキケシキ)なり

熱海より日金地蔵堂
までのぼる事五十町程
サイノ河原といふ所より
仰て富士山を望む時に
五月七日絶頂積雪如銀

六角の堂ハ地蔵丈六の
生像にして銅佛なり
うしろの草堂ハ修舍
なり

日金山頂丸山より南乃方を望右ハ熱海網代下田海上大島新島三宅島見ゆる

日金山頂より
北の方を望む
冨士山左ハ足高
山右ハ二子山

日金山頂より東の方を望む

房州上總
白ノ崎
真なづる

日金山頂より西の方を望
箱根山三島沼津 狩野川
冨士川見ユル

三穂

江尻の駅より一里餘右の方山中に庵原といふ庵原河

流るゝ清水ハ出る其河源をたづぬれば北瀧と名づく飛泉あり

山岩石を廻て流るゝ激し甚の山林よりして人物皆太布を

着　太布ハ科ノトヱル木皮ヲ以テ製ス　此一村紙を製して産業とす

庵原深山の婦女

同全圖

駿府町數九十六町有皆板屋作御城ハ清来の右にあり
四面山遶りて氣候不順夏月忽ち變じて冷氣となる
土俗曰冨士山より冷際乃風を吹落故なりと

久能寺觀音山ヨリ
冨嶽ヲ望圖

伊豆天城山
鶴巻山
鷲頭山
箱根山
二子山
足柄山
足高山
觀音山

昔雪舟遊于支那而所
圖富嶽景何乎望無知
者余登於駿陽矢部補
陀洛山上始觀之
寛政己酉春三月三日
寫於平安客館乃入
天覽
薩埵山
清見寺山
清水町
湊

八部龍華寺あり園中に大なる鐵覇王樹甚大樹なり
そのころ花盛にて殊にうるはしく久能寺は久能山ニアラズ別ナリ江尻海テ
石階をのぼりて観音堂あり眺望すれば眼下に清水湊
人家千餘軒あり清水川流出て蒼海中三穂の松原富
に富士を望む九難坂薩埵峠由井沖津江尻清見寺
山右に足高山足柄山箱根山二子山伊豆鶴巻山鷲頭山
天城山見えて日本第一の風景なり
遠州掛川の驛より秋葉山に行二里山路をこえて川を渡
又ゆく事二里川を越て森宿に冨高アリ茶師多シ夫より行事三里

一瀬といふ所に至る此前川を越事凡四十八瀬あり是より麓まで三里麓のまへに瑞雲坂をのぼり瑞雲寺まへより小天龍川舟渡あり掛川を入て一山峰大木多し杉檜の森し山尤高し麓より山に登る事五十町唐銅の鳥居あり額金明嶺。山門に最勝閣本堂に大登山といふ堂ハ南面本尊観音を安置す鎮守南向権現の社あり寺ハ禅宗秋葉寺と云是より三河國鳳来寺にゆく路也則寺の後の方坂をのほる事五十町戸倉と云所なる山坂多し半里ほど犀河舟渡天龍川の源也此邊惣て来る芋稗を

食事海なくして塩なし甚の深山にて櫟楮多し
夫より石寺へ一里熊村へ二里此邊深き山林幽巖人煙寂
寞としてあやしき地也婦人ハ旅客乃荷物を負て賃を
取男子といふとも海を見ず平地よ人家の並立るを見る事
なし熊村より一里半加宇連峠にあり又行一里
半巣山村此所坂路轉して峠あり遠州と三河の堺也
を越或四十四曲坂をおりて大野まで一里半此所皆深山也
大野ハ市街商家多し夫より板敷川を渡川の底岩石
如板故に名と称す鳳来寺麓より五十町山にのぼる

行者越といふ所一町余登るに皆巌石を攀て絶頂に到る遠州海遥に見えて山を連て波のおしよするに似て三四町山を下て石階の上に権現の祠あり階下に薬師堂あり末社本堂の後ろに多し左の方岩にそふて塔あり夫より石階を下る事九町余半に十二坊天台真言二派あり学頭天台なり松高院皆真言に醫王院の二坊も即あれど角屋町旅籠多しここを出て瀧川へ出る渓の中を流る川を舟にて渡る銭亀村を瀧川とよびて新城に里富商多し夫より野田へ二里十六町大木村へ三里豊川を渡りて小

東ハ高戸ヶ原家野ヶ原本野ヶ原を通りて 松原を過て
一里余郷御油往還へ出る
熊村
此辺農夫ハ舎を山の半に
作り州一二軒ばかり山ぎはに作
りて猪猿多く
畑をあらす故に
垣をむすぶ図なる
皆これ家ハ猪番
小屋なり日暮より
庄屋の宅に
夏日

鳳来寺乃方重山
かつぎりなしえける

勢州日永村ツンツク踊之圖
唱文句
ツンツン
ツンツク〱

テテテツクく西の山から
ヨイトコく

四日市盆踊
おんど唄
文句

四日市諏訪明神祭
見物近郷より出る
挑灯だし
夜ゝの山まいりとて
男女参詣する

勢州四日市の驛より薬師の前の宿日永村にて七月十三日十四日十五日盆中ツンツク踊とて小童或は十七八の女子又廿歳ばかりの女のこ白きさらし布の手拭をかぶりて腰に扇をさしまはり手をうちて輪になり唱此村に四町より此踊をなす一町づゝ唱文句をうたひぬ

七月十六日日永よりゆくこと三里余菰野といへる土方侯一萬石の領地の陣屋あり市中一二町夫より東北の方へ至十余町ほどして河原あり川より五六十間常に水なし雨降れば此川源は三里を隔湯の山青瀧と名づく瀧の流れなり

廿日湯山より悉く嶺野より二里餘一里まて方一里程の島を小笹お
ほし白真桔梗女郎花萩花盛し自実渓河械渡れは山中に入皆
砂山なりて砂流て山骨を顕大石道路を塞又所々半里渓
流を此中岩石をもて一生石頭を踊躍越し渓流甚深し
又所々四五町まても渓水を同く躍越し左右悪大山にして家を
さらしく出たる山を挟て坂屋舎を作り十軒許其中に湯
室ありて温泉所のなし火を焚湯とす浴する者多し此絶嶮岨
ありて大樹如し五穀不生此辺土なし皆小石なり大石の
破て砂となる如此

湯の山路
溪河乃
圖
湯の山
全圖
冠が岳
はちまきが
岳
アリ
湯源

作又裕りより出る此驛より京に屬す東方の風俗京に
婦人髪ハ風も常ハ京の流行ふらひ程ぞ社に詣る婦女
頭に帽子を被る夏月ハ絽を以て製る冬月ハ綿もしつる
桑名より此邊家作京に屬す

勢州石薬師より四里
山中に入石太神と云
数丈に直立して
白石なり

石太祠
より廿丁
入屏風
岩あり

十八九町ハカリ間
西岩絶壁白岩ニシテ松楓多シ秋ハ
紅葉ニシテ画ノ如シ

亭

神戸へ行路
高岡川
鈴鹿より落ル

八月二日日永村を發て神戸に至三日
に神戸を出て白子觀音堂（伊勢參宮道也）夫
より津にいたる藤堂侯（三十万石）乃城下なり
此處縦横に町續き富商多し雲津川舟
渡し此川伊賀山より流出る也夫より又川を
二瀬わたる此者松坂をゆく人家つゞき
富商多し夫より行事四里小畑又新
茶屋なといへるを過て宮川乃
舟渡わたれど山田人家建續ぎ繁昌

の絶し外宮内宮の間古市中乃地蔵と云所娼家多し

二見ノ浦
向フ所島
羽浦島ゝ
見ユル

六日二見ヶ浦乃方。山田を発して
山中にかゝりゆく事半里許にし
て川あり塩合川といふ舟わたし
程なく二見にかゝるそれより
その浦邊をめくりてゆけは
岸のはなれて一村に入川あり
舟にてわたる此山をこえて
又渚邊に出る池の浦といふ
所見えてそれより松山

にのりし志摩國鳥羽浦にある人家多し市街(イチマチ)あり是より四里また五十町一里より此浦は西國の方乃船を掛(カケ)關東(クハントウ)の方へ渡る日和(ヒヨリ)山登(ノボレ)バ四方乃島々見(ミエ)て佳景(カケイ)(ヨキケシキ)也

池の浦之圖
飛島七ツ嶋見ゆる東北方より

鳥羽
日より
山より
小の方
を望
島数
見ゆる
景色

巻之一終